

人材バンク “魅学” プログラム例記入書

登録者名（団体名） 木内 恭子（きうち ゆきこ）

プログラム名	広島の子の雲の下で生きて ～最後の語り部が被爆体験を語る～		
プログラムのねらい	自分の被爆体験を語り、戦争体験のない次の世代へ平和の大切さを つなげていきたい。		
講座名・テーマ 学習分野等	学 習 内 容 等 (具 体 的 に)	時間数 (分・時間)	備 考 (備品等)
1 被爆前のくらし	戦時中は、学生はみんないろいろな作業に駆り出されていました。私は家の近くにあった分教場に通っていました。戦争が厳しくても、穏やかな状態でした。通学する距離はそう長くなかったのですが、その道すがら、ときどきビラが落ちていました。それを拾うと「広島は日本三景の一つがあるいい町だから爆撃しないよ」というようなことが書いてありました。私は何回かビラを拾ったことがありました。家へ持ち帰って「こんなのが落ちてた」と見せました。すると、「時限爆弾かもしれないから早く捨てなさい」と言われ、外に捨てに行ったことがありました。広島町は爆撃されることがなくて穏やかだったと記憶しています。	全40～ 50分	
2 8月6日	私と兄はランドセルを背負って門の外へ出ました。分教場に着き、荷物を置いて、外に出たのがちょうど8時15分です。その時に突然ピカッと光りました。何にも前触れはありませんでした。私はただ遊んでいました。その光と同時に私は気絶したので、後は何にも分からなくなりました。その後、息苦しさの中で目を覚ましました。どうしたんだろう、ほんとに何が何だかわからない状況で目覚めました。じっと見ていましたが周りは真っ暗で何も見えませんでした。さらにじっとして目を凝らしていると、朝、夜が明けるようにだんだんだんだん、明るくなってきました。もう少しじっとしていると、私が今まで友達と一緒に遊んでいた様子が一変していました。・・・		
3 伝えたいこと	核は使ってもいけないし、使われてもいけない。あってもいけないと思います。私たちは何をするにも一人の力は微々たるものかも知れません。しかし、一人ひとりの力を合わせれば、ひとつの大きな力になります。私たちの体験を聞いた人たちがまた次の世代の若い人たちにつないでいくようになればいいと思います。		